

10. 富田の文化人

1) 蓮如上人(1415年～1499年)

蓮如上人の時代、京都東山の太谷にあった本願寺は、浄土真宗の中心寺院の影もないさびれた一貧寺で、天台宗の末寺とみなされているような状態でした。

蓮如上人ご自身も、六歳の時に実の母君が本願寺を去られた後、貧窮を極めた生活を余儀なくされます。御苦難の日々の中で、若き蓮如上人は、宗祖親鸞聖人(しんらんしょうにん)、覚如(かくにょ)上人、存覚(ぞんかく)上人など善知識の教学を学びに学ばれ、ご著書を破れるまで読み込み、遂にはその中に自らの救いをえられるに至りました。

蓮如上人は、本願寺8世を継がれて以後、一人でも多くの人に仏法の喜びを伝えるべく、精力的に、独自の布教活動をされました。

2) 隠元隆琦(いんげん りゅき) (1592年～ 1673年)

福建省福州福清県の生まれ。申国明末清初の禅宗の僧で、黄檗宗の祖として崇まられています。

1653年(承応2年)長崎に渡来し興福寺にいた隠元を妙心寺に迎え入れる試みは、企てに終わりました。

その後幕府は龍溪、禿翁、竺印らの申請にまかせ1655年(明暦元年)普門寺招請を許可しました。その年9月6日、龍溪らに迎えられ普門寺に入った隠元は、さっそぐ『普門現瑞』・『富田十詠』などの詩喝を創し、そんな隠元にまみえ、法話を聞こうと僧俗が普門寺に集まり、幕府から200名を越えてはならみと達しが出たほどでした。

宇治万福寺小開山するまでの約6年間、普門寺の住持であり、普門寺には彼の筆になる『獅林』の大きな扁が現存します。

いんげんまめ(隠元豆)の名は、隠元が日本へ持ち込んだことからついたとされています。

3) 藤田友閑 寛永(1624年～1644年)

家は代々造り酒屋屋号は大門寺屋といい通称は善兵衛という。

普門寺の龍溪和尚に師事し、また山城八幡の松花堂紹乗にも師事し書道を学ぶ。清蓮寺にある寺宝の「羅漢図」の大幅は友閑が書き寄贈した。